

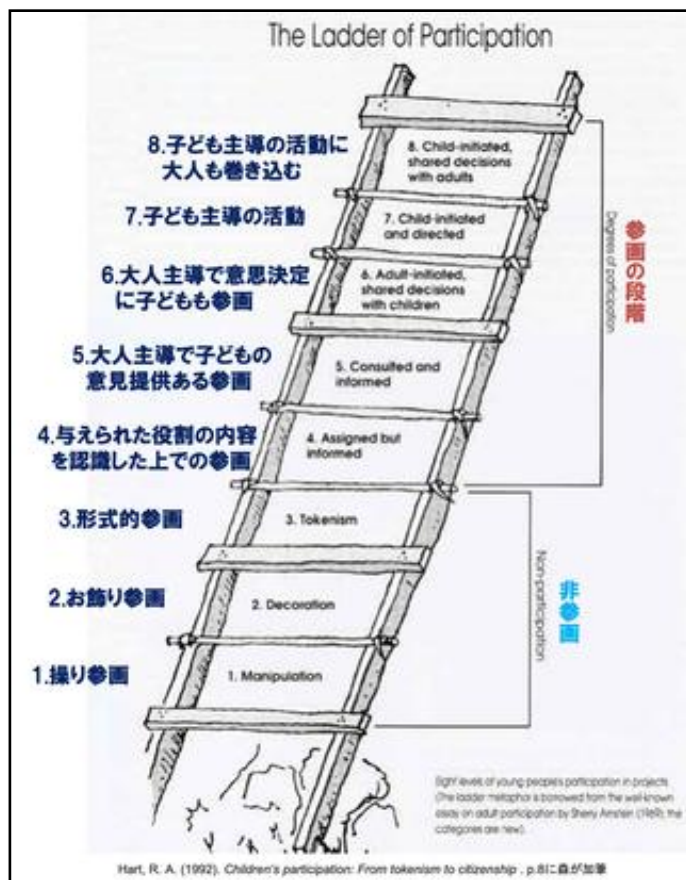


★ロジャー・ハートの『参画のはしご』って知っていますか???'★

ロジャー・ハート (Roger A. Hart) 氏は、『子ども・若者の社会参画や意思決定への参加』について研究してきた研究者です。現在はニューヨーク市立大学 (CUNY) 大学院センターの名誉教授で、心理学、社会福祉、環境科学などの分野を横断して研究してきました。特に、子どもや若者を単に『大人から指導される存在』としてではなく、『自分たちの生活や地域について意見をもち、意思決定に関わることのできる存在』として捉える研究で知られています。

ハート氏の代表的な著作の一つが、1992年にUNICEF (ユニセフ) から発表された『Children's Participation: From Tokenism to Citizenship (子どもの参画～形だけの参加から市民性へ～)』です。この中で、子ども・若者が意思決定にどの程度関わっているかを『8段階』で示した『参画のはしご (Ladder of Participation)』を提示しました。

タイトルにある『Tokenism (トークニズム・トークンの)』とは、この文脈では、『参加している形はつくりられているものの、実際には意思決定にほとんど影響を与えられない状態』を意味します。『参画のはしご』では、第3段階が『Tokenism (トークニズム・トークンの)』です。つまり、生徒に発言や参加の機会是与えられていても、その意見が実際の意思決定にほとんど影響しない



『形だけの参加』です。したがって、『From Tokenism to Citizenship』を学校教育に置き換えて考えると、ハート氏の『参画のはしご』は、単に『生徒を行事や活動に参加させたか』ではなく、『生徒が意思決定にどこまで関わっているか』を見るためのモデル」と考えると、とても分かりやすいと思います。

もちろん、学校現場には時間的な制約や、安全上の配慮、学校として責任をもって判断しなければならないこともあります。すべての場面で『はしごの一番上』を目指すべき、ということではありません。しかし、『形だけの参加』ではなく、『真の参画』の場면을『ひとつでも多く与えたい、つくりたい』と考えていることをご理解いただければ幸いです。

私が藤工で目指しているのは、『教職員と生徒が互いを尊重するパートナーとして、自分たちのいる場所を最高の場所にするために意見を出し合い、互いのウェルビーイングを大切にしながら協力し合うこと』です！前橋南高校や桐生市立商業高校に勤務していたとき、私は全校生徒に向かって、よく『私は生徒を「同僚」だと思っている！』と伝えていました。もちろん、教師と生徒では立場も役割も責任も異なります。しかし、『よりよい学校をつくる』という目的に向かって、ともに考え、ともに行動するという意味では、私は生徒を大切な『パートナー』だと思っています。藤工でも、そんな関係をつくっていきたいと思っています！

そのためには、教職員である私たちにも意識していく必要があります。生徒と教師の関係を、単純な「上下関係・主従関係」として捉えるのではなく、教師自身が生徒の声に耳を傾け、ともに考える姿勢をもつことが大切です。スポーツの世界でも、コーチを一方的に教え込む「指導者」としてだけではなく、選手の成長を支える『伴走者・支援者』として捉える考え方が広がっています。『coach（コーチ）』という言葉は、もともと「馬車」を意味する言葉に由来します。馬車が人を目的地まで運ぶように、教師やコーチも、『生徒自身が目指す目的地へ向かって進んでいけるよう支援する存在』だと考えることができます。



では、現在の藤工は『参画のはしご』のどのあたりまで達する場面があるのでしょうか？学校全体を一つの段階に当てはめることはできませんが、さまざまな取組の中には、第6段階の『教職員が発案し、生徒と意思決定を共有する』に達しているものもあるのではないのでしょうか。昼休みや放課後に校長室を訪ねてくれる生徒の中には、自分たちで課題やアイデアを見つけ、『こんなことをやってみたい！』『学校をこんなふうにしたい！』『藤工を盛り上げたい！』と話してくれる生徒もいます。これは、第7段階の『生徒が発案し、生徒が主導する』、さらには第8段階の『生徒が発案し、教職員と意思決定を共有する』につながっていく、とても大切な一歩だと思っています。私は、そんな生徒たちのアイデアをできるだけ大切にしながら、必要に応じて『助言』したり、『支援』したりしています。

自分の考えを言葉にし、仲間と話し合い、時には大人と交渉しながら、自分たちのアイデアを実現していく。そんな経験こそが、『Agency（自ら考え、判断し、行動する力）』を育てる絶好の機会です。そして、そうした経験を積み重ねた生徒たちは、きっと社会に出たときにも、『自ら考え、周囲の人と協働しながら、新しい価値を生み出せる人』になってくれると信じています。

秋から冬へ、そして春へ。これからの藤工には、まだまだたくさんの『成長の場』が待っています。生徒も、教職員も、ともに考え、ともに挑戦し、ともに成長する学校へ。がんばれ藤工！がんばれ藤工 BLAZE！これからも藤工をどうぞよろしくお願いします！

校長 星野 亨

